発達のなかの煌（きら）めき

第Ⅰ部　障害のある子ども・なかまの発達

白石正久　白石恵理子

しらいし　まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第9回　「三次元の世界」を切り開く
―仲間とともに「だんだん大きくなる」

発達の質的転換期では、山登りの「胸突（むな）き八丁」を乗り越えるような苦しいときがあるものです。「四歳の節」での苦しさは、機能・能力の部分的とも言える制約から生じることがあります。たとえば、十一月号でお話ししたように、利き手にハサミを持ち他方の手で紙を持って曲線を切り取ることや、服のボタンをとめることなど、「～しながら～する」と両手を協応させて二つの操作をまとめ上げていく活動がうまくできないことがあります。そんな苦手なことがあると、外界を対比、比較によって認識し、自分もそこに位置づけて他者と比べる「四歳の節」の心は、「できるか、できないか」「じょうずか、へたか」という尺度で自分をみつめる二分的評価にとらわれやすいものです。

「ぼく、へたやから」

かつて、『みんなのねがい』の連載「発達とは矛盾をのりこえること」（一九九九年に全障研出版部より単行本化）で「シゲちゃん」のことを紹介しました。彼の働く作業所のWEBページに、今、四十歳を迎える姿が紹介されていました。労働に誇りを感じている表情に、学校時代のこと、先生や友だちのことが蘇（よみがえ）ってきました。

シゲちゃんは就学の時点で、言語の理解では対比的概念である「重い－軽い」や10までの数の概念を獲得しており、「四歳の節」の力を確かにしているようでした。しかし、大脳皮質の片側に小さな萎縮があり、一方の手指に軽いマヒがありました。だから、モデルにあわせて両手を交互に開閉する「両手の交互開閉課題」（「もう一つの『発達のなかの煌めき』第七回）では、二、三度はがんばるのですが、途中で両手同時の開閉になってしまいました。日常生活でも両手を協応させる活動が苦手で、「ぼく、へたやから」と尻込みしていました。

小学校の六年間、シゲちゃんは出会うたびに確かな発達をみせてくれたのですが、「四歳の節」である「二次元の世界」から「三次元の世界」を開いていく兆しがみられませんでした。発達の「胸突き八丁」を越えていくときの、その一歩を重くしているのは、自分の可能性への信頼をもちきれない心なのではないかと私は考えました。

そんなシゲちゃんでしたが、小学校の最終学年になって描いてくれたのは、「ラーメン屋さん」でした（写真①）。「ラーメン大好き」なシゲちゃんがあこがれをもち、未来へ開かれた時間のなかに社会との接点をみつけて、「ラーメン屋さん」になる自分をイメージしているのがよくわかりました。そのころ、養護学校（当時）への体験入学を経験して、中学校は「養護学校へ行く」とはっきり言いました。理由は、「おしごとしたいに決まってるやろ」。その「おしごと」の意味は、後に明らかになります。

友だち大好きになる

養護学校中学部に進学してもシゲちゃんは、「ぼく、へたやから」と尻込みするのでした。そんなシゲちゃんに対して、まず先生が考えたのは、シゲちゃんが「お兄さん」のように思ってもらえて、お互いに大好きになれる友だちをつくりたいということでした。まずは得意な相撲でいっしょに遊ぶ楽しさを感じてくれたらいいと、近くのクラスの笑顔が素敵なKくんに引きあわせてみました。響きあうものがあったのでしょうか、「Kくんいるかな」と毎日出かけていきました。相撲は本気で勝ちたいのですが、ときどきKくんを勝たせているような姿もありました。そんなとき「Kくん、強くなったなぁ」と優しい目で見つめているのでした。Kくんのねがいがわかり、それをいっしょに叶えたかったのです。

シゲちゃんは、みんなが楽しそうに話しながらとりくんでいる「裁縫」には背を向けていました。先生は、シゲちゃんの自分へのイメージを塗りかえる試みをはじめました。燦然（さんぜん）と輝くミシンを運んできて、「みんなが縫っている雑巾では教室掃除に足りないから、シゲちゃんがミシンで縫ってプレゼントしたら」と提案したのです。針に注意を向けながらミシンを操作するのは簡単ではないのですが、思ったよりうまくできて、縫い上げた雑巾は七枚になりました。一枚しか縫えなかった友だちに、一枚ずつ分けることができました。ミシンに向かうシゲちゃんを「がんばれ」と励ましてくれた友だちは、シゲちゃんの雑巾を喜んで受けとってくれたのです。そのことを書いたシゲちゃんの作文があります。

「マラソンしたこと

今日学校でマラソンをしました。ぼくも走りました。とってもつかれました。

（中略）とってもよかったのは、Tくんたちがよろこんでくれたことです。もう

連載の解説版「もう一つの『発達のなかの煌めき』」第七回は、こちらから見ることができます。